

## 【調査報告】

# いじめ被害経験を有する学生のレジリエンス資源

## Resilience resources of students with bullying experience

米田 龍大（北海道医療大学大学院看護福祉学研究科博士後期課程）

中村 和彦（北星学園大学社会福祉学研究科）

志渡 晃一，大友 芳恵（北海道医療大学大学院看護福祉学研究科）

### 要旨

本研究の目的は環境要因に注目し、非いじめ被害経験学生といじめ被害経験学生の比較から、いじめ被害経験を有する学生のレジリエンス資源に関する示唆を得ることである。2018年4月～9月に道内12の高等教育機関に所属する学生2,693名を調査し、2,260名（87.6%）から有効回答を得た。いじめ被害経験の有無による層化後、目的変数を抑うつ症状（CES-D）、説明変数を精神的回復力尺度、家族関係、日常生活満足度として関連を検討した。いじめ被害経験者334名の内、117名が低うつ群（35.0%）に該当した。いじめ被害経験が有りながらも抑うつ傾向にない者（以下：レジリエンス群）の特徴として、心理的要因を調整した上でも、良好な家族関係や対人関係の日常生活満足度が高い等、環境面のレジリエンス資源について独立した関連が認められた。非いじめ被害経験群との比較では、いじめ被害経験群の特徴として「家族の愛を感じる」の項目で関連がみられた。

Keywords: 学生, いじめ, レジリエンス (Resilience), 抑うつ, 横断研究

### I. はじめに

平成30年度「児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査」(文部科学省, 2019)によると、わが国において認知されたいじめの件数が54万件を超え、過去最高値を記録した。いじめ被害直後の影響は周知の事実であるが、長期的影響についても報告されている。坂西(1995)は過去のいじめ被害経験について当時の苦痛が大きい程、身体的に疲れやすく、精神的不安を感じやすいことを指摘している。荒木(2005)は、いじめ被害体験者が青年期後期において対人的ストレスイベントを多く体験しているわけではないにもかかわらず、非被害体験者よりも不安や抑うつ傾向にあることを示している。水谷・雨宮(2015)は小中学校時代のいじめ被害経験が自尊感情の低下を通じて、大学生現在の幸福度を低下させると述べている。いじめ防止対策推進法などに基づく対策も取られているが、いじめの被害に遭う者は依然として多く、長期間にわたり身体的・精神的な困難を引き起こすいじめは重大な逆境状況といえる。

一方でこうした逆境に遭ったにもかかわらず、その後、不適応状態を示さない者も一定数報告されており、その一因としてレジリエンス(Resilience)に注目が集まっている。レジリエンスについて統一された定義は未だないが代表的な定義をみると、「レジリエンスとはその人にとって重い逆境、重大な困難・難事が表れる中で、個人の心理的、社会的、文化的、身体的、物的資源から本人に作用するものを探し出し(navigate)、順調な生活(well-being)を維持する能力であると共に、これらの資源が文化的に本人にとって意味ある方法で提供され、利用できるように、交渉する(negotiate)個的・集合的な能力のことである(Ungar, M., 2008; Unger, M., =2019)」や「困難な状況や、脅威的な状況にもかかわらず、適応する過程、能力、結果を指す(Masten, A. S.・Best, K. M.・Garmezy, N., 1990)」と定義されている。これらレジリエンス概念の中核要件は、逆境に遭遇することと、逆境状態にあったにもかかわらず、その後、適応的な状態を示すことだといわれている(秋山, 2019; 平野, 2016)。

レジリエンスの促進要因や保護要因などは総称し

てレジリエンス資源（秋山，2019；Olsson, C. A.・Bond, L.・Burns, J. M. et al, 2003）と呼ばれているため本論でもレジリエンス資源という語を使用する。わが国におけるレジリエンス研究は、レジリエンス資源の中でも個人要因である心理的特徴などに焦点を当てた尺度開発や尺度の構成要素の検討が中心であり（庄司，2009；佐藤・金井，2017），物理的環境や対人関係など環境要因との関連については十分に焦点が当てられていない。レジリエンスを生み出すには、適応状態を個人の心理的要因のみに求めるのではなく、環境資源と個人特性の交互作用が必要だといわれており（Fraser, M. W., =2009：33；仁平，2014），広く環境までも視野に入れたレジリエンス資源の検討が必要である。

いじめ被害経験からの回復については、個人の心理的要因だけではなく環境要因についても重要だと思われるものの、これまでいじめ被害経験を有する学生のレジリエンス資源について環境面に焦点を当てた研究は十分に行われていない。いじめ被害は誰もが経験する可能性があり、その影響を早期に軽減することは、後の健康で有意義な生活の実現に向けて重要だと考えられる。そこで本研究では特に環境要因に焦点を当て、いじめ被害経験のない学生といじめ被害経験を有する学生を比較し、いじめ被害経験を有する学生のレジリエンス資源に関する示唆を得ることを目的とする。

## II. 方法

### 1. 調査期間・対象・実査方法

2018年4月から9月に北海道内にある12の高等教育機関に所属する学生2,693名を対象に無記名自記式質問紙票を用いた集合調査を行った。

### 2. 調査項目

調査項目は、1) 性・年齢、2) いじめ被害経験の有無1項目、3) 米国国立精神保健研究所開発疫学的うつ病評価尺度（以下：CES-D）日本語版20項目、3) 家族関係に関する3項目、4) 日常生活満足度9項目、5) 精神的回復力尺度（以下：ARS）21項目とした。

### 3. 集計・分類・分析方法

回収した質問紙票をもとにデータセットを作成した（Microsoft Excelを使用）。質問紙票の回収数は2,580名分（95.8%）であり、目的変数および性・年齢に欠損があった者を除いた有効回答数は2,260名分（87.6%）であった。

CES-D日本語版は抑うつ傾向のスクリーニング尺度であり、20項目4件法で質問し、既定の方法にて合計点を算出した。合計点は0点から60点の範囲に分布し、高得点であるほど抑うつの傾向がある。先行研究（米田・児玉・安藤ほか，2019；島・鹿野・北村ほか，1985）を参考に16点以上を「高うつ群」、16点未満を「低うつ群」とした。なお、レジリエンス研究では逆境と回復の定義が必要であり（庄司，2009），いじめ被害経験の有無による層化後、荒木（2005）に倣い、いじめ被害経験を有する対象者を「高うつ群」と「低うつ群」に分類し、いじめ被害経験があるにもかかわらず、現在低うつ群に該当する者をレジリエンスが発揮されている状態とした。

家族関係に関する項目は各項目の該当・非該当を質問し、いずれかを選択してもらった。日常生活満足度は1点（満足していない）から10点（満足している）の10件法で質問し、7点以上を「満足群」、7点未満を「普通・不満群」として2群に分類した。

ARSはレジリエンスの心理的特性を測定する尺度であり、21項目5件法で質問する。既定の方法で合計点を求めた。合計点は21点から105点の範囲に分布し、先行研究（児玉・米田・安藤ほか，2018）と同様に74点以上を「高ARS群」、74点未満を「低ARS群」として2群に分類した。

### 4. 解析方法

解析にあたり、目的変数をCES-D、他の変数を説明変数とした。単変量解析としてFisherの正確確率検定、多変量解析としてロジスティック回帰分析（ステップワイズ法）を行った。有意水準は5%（両側検定）とした。

### 5. 倫理的配慮

調査対象となる学生に対し、1) 公表に当たり、結果は統計的処理を行い、個人が特定されることはないこと、2) 得られたデータは研究以外の目的での使

用はしないこと、3) 調査への参加・不参加により不利益を被ることはないこと等を書面及び口頭で十分に説明し、調査紙票の提出をもって同意したものとみなした。北海道医療大学看護福祉学部・看護福祉学研究科倫理委員会の承認を得て行った(承認番号: 17N024024)。

### Ⅲ. 結果

#### 1. 基本属性

表1に対象者の基本属性を示した。いじめ被害経験を有する者は334名(男性98名、女性236名)であった。低うつ群該当率について、いじめ被害経験なし群(1,077名、55.9%)と比較し、いじめ被害経験あり群(117名、35.0%)では有意に該当率が低かった。高ARS群についてみると、いじめ被害経験あり群(125名、38.2%)といじめ被害経験のなし群(809名、42.8%)で該当率に有意差は見られなかった。

表1. 基本属性

	いじめ被害経験あり	いじめ被害経験なし	p
全体	334 (14.8)	1926 (85.2)	-
男性	98 (11.8)	734 (88.2)	-
女性	236 (16.5)	1192 (83.5)	-
平均年齢±SD	20.1 ±2.7	19.5 ±1.9	-
低うつ群	117 (35.0)	1077 (55.9)	<0.01
高ARS	125 (38.2)	809 (42.8)	0.13

p: Fisherの正確確率検定  
SD: 標準偏差  
低うつ群: CES-D16点未満  
高ARS群: ARS74点以上

#### 2. 抑うつ傾向と心理的要因との関連

表2にいじめ被害経験別の抑うつ傾向とARSの関連を示した。単変量解析の結果、いじめ被害経験あり群、いじめ被害経験なし群ともに高うつ群と比較し低うつ群では、高ARS群の該当率が有意に高かった。多変量解析の結果、いじめ被害経験あり群では高ARS群について高うつ群を基準とすると低うつ群のオッズ比は3.8(95%CI: 2.4-6.2)であり、独立に関連が認められた。また、いじめ被害経験なし群についてオッズ比は4.7(95%CI: 3.8-5.7)であり独立に関連が示された。

表2. いじめ被害経験別にみた抑うつ傾向とARSの関連

	いじめ被害経験 あり					いじめ被害経験 なし					n(%) <sup>a</sup>
	低うつ群	高うつ群	p	OR	95%CI	低うつ群	高うつ群	p	OR	95%CI	
	117 (100.0)	217 (100.0)			(下限値 — 上限値)	1077 (100.0)	849 (100.0)			(下限値 — 上限値)	
高ARS群	67 (58.8)	58 (27.2)	<0.01	3.8	(2.4 — 6.2)	621 (58.1)	188 (22.9)	<0.01	4.7	(3.8 — 5.7)	

p: Fisherの正確確率検定  
OR: 高うつ群を1とした場合の低うつ群のオッズ比を示した  
ロジスティック回帰分析(ステップワイズ法、調整変数: 性・年齢)  
高ARS群: ARS74点以上  
a: 一部例数が異なる

#### 3. 抑うつ傾向と家族関係との関連

表3にいじめ被害経験別の抑うつ傾向と家族関係との関連を示した。単変量解析の結果、いじめ被害経験あり群について高うつ群と比較し低うつ群では「家族の仲が良い」「家族の愛を感じる」の2項目で該当率が高かった。性・年齢及びARSで調整した多変量解析の結果、独立した関連が認められたのは「家

族の愛を感じる」の1項目であり、高うつ群を基準とした時の低うつ群のオッズ比は1.7(95%CI: 1.0-2.8)であった。いじめ被害経験なし群ではすべての項目で高うつ群と比較し、低うつ群で該当率が高かった。多変量解析の結果、「家族の仲が良い」の1項目で独立した関連が認められた(オッズ比1.6[95%CI: 1.3-1.9])。

表3. いじめ被害経験別にみた抑うつ傾向と家族関係の関連

n(%)<sup>a</sup>

	いじめ被害経験 あり				いじめ被害経験 なし			
	低うつ群 117 (100.0)	高うつ群 217 (100.0)	P	95%CI OR (下限値 — 上限値)	低うつ群 1077 (100.0)	高うつ群 849 (100.0)	P	95%CI OR (下限値 — 上限値)
1 家族とよくコミュニケーションをとる	91 (77.8)	159 (69.1)	0.10		818 (76.0)	555 (65.4)	<0.01	
2 家族の仲が良い	86 (73.5)	129 (59.4)	0.01		777 (72.1)	497 (58.5)	<0.01	1.6 (1.3 — 1.9)
3 家族の愛を感じる	82 (70.1)	112 (51.6)	<0.01	1.7 (1.0 — 2.8)	625 (58.0)	408 (48.1)	<0.01	

p: Fisherの正確確率検定

OR: 高うつ群を1とした場合の低うつ群のオッズ比を示した

ロジスティック回帰分析(ステップワイズ法, 調整変数: 性・年齢・ARS)

a: 一部例数が異なる場合がある

## 4. 抑うつ傾向と日常生活満足度との関連

表4 にいじめ被害経験別の抑うつ傾向と日常生活満足度との関連を示した。単変量解析の結果、いじめ被害経験あり群の低うつ群で該当率の高かった項目は「講義(ゼミ・実習含む)に満足している」「学校施設に満足している」「同級生との関係に満足している」「学校生活全般に満足している」「家族・学校以外の友人知人との関係に満足している」「家族との関係に満足している」「私生活全般に満足している」の7項目であった。包括的質問である「学校生活全般に満足している」と「私生活全般に満足している」を除く7項目について性・年齢及びARSで調整した多変量解析の結果、独立した関連が認められたのは「同級生との関係に満足している」「家族との関係に

満足している」の2項目であり、高うつ群を基準とした時の低うつ群のオッズ比はそれぞれ1.9(95%CI: 1.1-3.3)および2.8(95%CI: 1.5-5.3)であった。いじめ被害経験なし群についてみると、すべての項目で高うつ群と比べ低うつ群で該当率が高かった。多変量解析の結果、「講義(ゼミ・実習含む)に満足している(オッズ比1.4[95%CI: 1.1-1.8])」「先輩との関係に満足している(オッズ比1.3[95%CI: 1.1-1.7])」「同級生との関係に満足している(オッズ比1.6[95%CI: 1.3-2.1])」「家族との関係に満足している(オッズ比1.9[95%CI: 1.4-2.4])」の4項目で独立した関連が示された。

表4. いじめ被害経験別にみた抑うつ傾向と日常生活満足度との関連

n(%)<sup>a</sup>

	いじめ被害経験 あり				いじめ被害経験 なし			
	低うつ群 117 (100.0)	高うつ群 217 (100.0)	P	95%CI OR (下限値 — 上限値)	低うつ群 1077 (100.0)	高うつ群 849 (100.0)	P	95%CI OR (下限値 — 上限値)
1 講義(ゼミ・実習含む)に満足している	53 (45.3)	68 (31.3)	0.01		485 (45.1)	221 (26.0)	<0.01	1.4 (1.1 — 1.8)
2 学校施設に満足している	49 (41.9)	59 (27.2)	0.01		435 (40.4)	236 (27.8)	<0.01	
3 教員との関係に満足している	46 (39.3)	64 (29.5)	0.09		418 (38.9)	187 (22.1)	<0.01	
4 先輩との関係に満足している	65 (56.0)	101 (46.5)	0.11		623 (58.1)	328 (38.9)	<0.01	1.3 (1.1 — 1.7)
5 同級生との関係に満足している	89 (76.1)	113 (52.1)	<0.01	1.9 (1.1 — 3.3)	875 (81.3)	510 (60.3)	<0.01	1.6 (1.3 — 2.1)
6 学校生活全般に満足している	77 (66.4)	73 (33.6)	<0.01		682 (63.4)	320 (37.8)	<0.01	
7 家族・学校以外の友人知人との関係に満足している	94 (80.3)	138 (63.6)	<0.01		916 (85.1)	584 (69.1)	<0.01	
8 家族との関係に満足している	99 (84.6)	132 (60.8)	<0.01	2.8 (1.5 — 5.3)	924 (85.8)	568 (66.9)	<0.01	1.9 (1.4 — 2.4)
9 私生活全般に満足している	95 (81.2)	115 (53.0)	<0.01		852 (79.2)	441 (51.9)	<0.01	

p: Fisherの正確確率検定

OR: 高うつ群を1とした場合の低うつ群のオッズ比を示した

ロジスティック回帰分析(ステップワイズ法, 調整変数: 性・年齢・ARS)

a: 一部例数が異なる場合がある

#### IV. 考察

いじめは短期的、長期的に健康や生活の質の悪化に繋がる逆境状況であり、わが国においていじめの被害経験を有する者は少なくない。さらに諸外国で行われた調査では、思春期や青年期のいじめ被害経験が成人期以降の精神衛生的問題のリスク要因となる可能性も報告されている(Copeland, W. E.・Wolke, D.・Angold, A. et al, 2013 ; Sigurdson, J. F.・Undheim, A. M.・Wallander, J. L. et al, 2015)。こうした状況下において、いじめ被害に遭ったとしてもその後、健康で有意義な生活を実現するための方策を検討することは重要な課題だと思われる。そのため本研究では特に環境要因に焦点を当て、いじめ被害経験を有する学生のレジリエンス資源に関する示唆を得るために分析を試みた。その結果、いじめ被害経験がありながらも現在抑うつ傾向にないレジリエンスを発揮できている群（以下：レジリエンス群）では、心理的要因に加え、周囲の対人関係や日常生活の満足度が高いなど、環境面でのレジリエンス資源も充実していた。

心理的要因であるARSについてみると、いじめ被害経験の有無にかかわらず、高うつ群と比較し低うつ群で高ARS群該当率が高かった。ARSはレジリエンスを導く心理特性であり(小塩・中谷・金子ほか, 2002)、従来いじめ被害経験の有無による層化はされていないものの、様々な場合にレジリエンスと抑うつ症状が負の関連にあることが示されている(田中・兒玉, 2010 ; 立石・立石, 2011)。本研究の結果、ARSについてはいじめ被害経験を有する学生のレジリエンス資源であると同時に、より広く精神的健康の保持や増進に関連する要因だと推察する。

次に環境要因との関連について単変量解析の結果をみると、レジリエンス群の特徴として、家族関係では家族の仲が良く、家族の愛を感じていた。また、日常生活満足度についてレジリエンス群は総じて講義や学校施設、同級生との関係に満足しており、学校生活全般に満足していた。さらに家族・学校以外の友人知人との関係、家族関係など私生活全般に満足していた。古木・森田(2009)によると家族や友人などの他者からの受容的態度や現在の自分への満足感を高めることが挫折経験から自己受容につなが

る過程において重要であることを示唆しており、本研究もこれを支持する結果であった。さらに学生という部分に引き付けると、ゼミや実習も含む講義や学校施設の満足度も関連しており、講義を行う教員の工夫や学校施設の充実など環境面の整備が学生にとって重要なレジリエンス資源となる可能性が考えられる。いじめ被害経験なし群との比較についてみると、いじめ被害経験なし群では、いじめ被害経験あり群で関連の示されていない「家族とよくコミュニケーションをとる」「教員との関係に満足している」「先輩との関係に満足している」について関連が認められている。この差異については検出率の差である可能性が考えられる。

多変量解析についてみると性・年齢、ARSで調整した場合において、いじめ経験あり群では「家族の愛を感じる事」、「同級生との関係に満足している事」「家族との関係に満足している事」の3項目で有意な関連が認められており、すべてレジリエンスを促進する方向のオッズ比を示している。これは従来いじめ被害経験を有する学生のレジリエンス資源とされていた心理的要因に加えて、対人関係などの環境要因が重要なレジリエンス資源となり得る可能性を示唆している。今後、いじめ被害経験からの回復において、個人の心理的側面を強化する働きかけだけではなく、家族関係や友人関係の充実など環境面の整備や調整を充実させることがレジリエンス資源となる可能性があると推察する。

さらに家族との関係について、いじめ被害経験あり群といじめ被害経験なし群で違いがみられたことは興味深い結果である。岩崎・海蔵寺(2011)による事例検討では当事者の言葉に「親は自分自身のことを客観的には知っていたが自分を受け入れてくれない気がした」とあり、その後、継続的な交流を重ねる中で「やっと親子になれた」という語りが見られ、それが回復の契機になった可能性を示唆している。いじめという重大な逆境からの回復において重要となるのは、単なる気分転換のために和気藹々と仲良く話をしているということではなく、より根底に流れる安心感や自分自身を大切にされている、一人の個人として尊厳をもって接してもらっている、つながりを感じられることが重要だと推測する。今回いじめ被害経験の有無により関連要因に違

いがみられたことは、こうした背景を含んでいる可能性が考えられる。しかし仲が良いことと愛を感じるものの差異について十分な知見は得られておらず、今後どのような体験が愛を感じることにつながり、レジリエンス資源となるか更なる検討が必要である。

本研究の有効性は十分に検討されていなかったいじめ被害を有する学生のレジリエンス資源について環境面に焦点を当て検討し、性、年齢、心理的要因を調整したうえでも環境要因がレジリエンス資源となり得る可能性を示唆したこと、いじめ被害経験の有無で層化したうえでの比較を行い、いじめ被害経験がある者に特徴的なレジリエンス資源となる可能性がある要因を示したことがある。限界及び課題として、横断研究であるため因果関係の推定が困難である点が挙げられる。いじめ被害経験時期やいじめ被害の重症度などについては十分に把握できておらず、今後、経験時期や重症度を層化した上での検討を行うことが課題である。さらに今回注目した家族関係と日常生活満足度以外の要因も含めた検討を要する。特に重要性が示唆された「家族」という資源がない場合についても今後の検討課題となり得ると思われる。

## 文献

- 秋山薊二 (2019) 「人のレジリエンス資源から見るソーシャルワーク」『関東学院大学人文科学研究報』42, 31-50.
- 荒木剛 (2005) 「いじめ被害体験者の青年期後期におけるレジリエンス (resilience) に寄与する要因について」『パーソナリティ研究』14, 54-68.
- 坂西友秀 (1995) 「いじめが被害者に及ぼす長期的な影響および被害者の自己認知と他の被害者認知の差」『社会心理学研究』11 (2), 105-115.
- Copeland, W. E・Wolke, D・Angold, A et al (2013) 「Adult Psychiatric Outcomes of Bullying and Being Bullied by Peers in Childhood and Adolescence」『JAMA Psychiatry』70 (4), 419-426.
- Fraser, M. W (2004) 「Risk and Resilience in Childhood: An Ecological Perspective」 (=2009, 門永朋子・岩間伸之・山縣文治『子供のリスクとレジリエンス』株式会社ミネルヴァ書房.)
- 平野真理 (2016) 「レジリエンス～多様な回復を尊重する視点～」『広島大学大学院心理臨床教育研究センター紀要』15, 27-30.
- 古木美緒・森田美弥子 (2009) 「挫折経験から自己受容に至るプロセス：大学生を対象にして」『日本教育心理学会総会発表論文集』(静岡大学), 177.
- 岩崎久志・海蔵寺陽子 (2011) 「過去のいじめられ経験からの回復過程について—自己否定感のあるクライアントの事例を通して」『流通科学大学論集 人間・社会・自然編』24, 29-39.
- 児玉壮志・米田龍大・安藤陽子ほか (2018) 「高等教育機関に所属する学生のレジリエンスとその関連要因」『北海道医療大学看護福祉学部学会誌』14, 65-71.
- Masten, A. S・Best, K. M・Garmezy, N (1990) 「Resilience and development: Contributions from the study of children who overcome adversity」『Development and Psychopathology』2 (4), 425-444.
- 水谷聡秀・雨宮俊彦 (2015) 「小中高時代のいじめ経験が大学生の自尊感情と Well-Being に与える影響」『教育心理学研究』63 (2), 102-110.
- 文部科学省 (2019) 「平成 30 年度児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査」(<https://www.mext.go.jp/content/1410392.pdf>, 2019. 1. 10)
- 仁平義明 (2014) 「レジリエンスとは何か」『児童心理』68 (11), 13-20.
- Olsson, C. A・Bond, L・Burns, J. M et al. (2003) 「Adolescent resilience: a concept analysis」『Journal of Adolescence』26, 1-11.
- 小塩真司・中谷素之・金子一史ほか (2002) 「ネガティブな出来事からの立ち直りを導く心理的特性-精神的回復力尺度の作成-」『カウンセリング研究』35, 57-65.
- 佐藤暁子・金井篤子 (2017) 「レジリエンス研究の動向・課題・展望：変化するレジリエンス概念の活用に向けて」『名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要. 心理発達科学』64, 111-117.
- 島悟・鹿野達男・北村俊則ほか (1985) 「新しい抑うつ性自己評価尺度」『精神医学』27 (6), 717-723.
- 庄司順一 (2009) 「レジリエンスについて」『人間福祉学研究』2, 35-47.

- Sigurdson, J. F・Undheim, A. M・Wallander, J. L (2015)  
「The long-term effects of being bullied or a bully in adolescence on externalizing and internalizing mental health problems in adulthood」『Child and Adolescent Psychiatry and Mental Health』9, 1-13.
- 田中千晶・児玉憲一 (2010)「レジリエンスと自尊感情, 抑うつ症状, コーピング方略との関連」『広島大学大学院心理臨床教育研究センター紀要』9, 67-79.
- 立石恵子・立石修康 (2011)「作業療法学科学生 of 臨床実習における抑うつとレジリエンス」『九州保健福祉大学研究紀要』12, 113-116.
- Ungar, M (2008)「Resilience across Cultures」『The British Journal of Social Work』38 (2), 218-235.
- Ungar, M (2019)「Factors and Processes Associated with Resilience among Children and Youth」(=2019, 秋山薊二監訳・中村和彦共訳「子ども・若者のレジリエンスに関連する要素と過程」『ソーシャルワーク研究』45 (3), 52-62.)
- 米田龍大・児玉壮志・安藤陽子ほか (2019)「高等教育機関に所属する学生の抑うつ症状と首尾一貫感覚およびレジリエンスとの関連に関する専攻別検討」『北海道医療大学看護福祉学部学会誌』15, 39-43.